

保育士養成課程の学生における保育体験活動による学び —実習・就職への意欲や不安との関連性—

Learning through the childcare volunteer experience in junior college students
- In relation with motivation and anxiety for internship and employment -

木村 由希 ・ 大内 晶子 ・ 室谷 直子

The purpose of this study is to investigate how experience of childcare volunteer affect the emotion of following internship and childcare employment. We conducted questionnaire survey to 139 junior college students in the department of early childhood education and care about content and quantity of their volunteer activities, motives of entrance into college, and motivation and anxiety for internship and future childcare employment. Results showed that majority of students were highly motivated for volunteer and felt effectiveness from the volunteer experience. Results from hierarchical multiple regression analysis showed that motivation for internship and future childcare employment were explained by both motive of entrance into college, which intend professional training, and volunteer experience, although, anxiety for internship was explained only by motive of entrance into college. These results suggests that the importance of prior learning through volunteer experience before internship and employment and of guidance for students who have low motivation for future childcare employment to prepare internship program.

2019年1月30日受付

KIMURA Yuki 幼児教育保育学科・准教授（保育学）

OHUCHI Akiko 幼児教育保育学科・准教授（発達心理学）

MUROYA Naoko 幼児教育保育学科・教授（障害児心理学）

問題と目的

近年、多くの教育機関が学生に対し学外での研修をさまざまな形で実施している（河野、2007）。保育者養成においても、子どもや地域と関わる経験が乏しい学生が見られる中、学生がボランティアを経験することに対し多様な意義と有用性を見出し、ボランティア活動を保育者養成教育の中に位置づける養成校も多い。小山・岡村（2016）は、保育者養成課程の学生や卒業生へのインタビューから、ボランティア活動により学生の主体的な学びが促進されることや、主体性・積極性といった保育者の資質向上がもたらされることを報告している。また、地域で活動することを通し社会性が形成されることや内面の成長（福地・竹内・宮本・古徳・大見・柴田・本間・高畠、2016）、保護者や地域住民との関わり方（野中、2015）、自信や意欲、感謝の気持ちや仲間への思いやりが生まれるといった意識の変化に加え、実践的な音楽表現力の向上（浦田・山口・平野、2016）といった学びがもたらされることがアンケートに基づき報告されている。

一方、三澤（2016）は学外実習への不安を募らせる学生が多いことを報告し、その要因として現場への適応や保育実践、子どもとの関係に対する不安を見出すとともに、学生がボランティアを希望するにもかかわらず授業やアルバイトの忙しさからボランティア活動に参加しづらい現状があることを明らかにした。筆者らの所属する短期大学においても、生育過程で乳幼児や障害児（者）等とかかわる経験をほとんど持つことのないまま本学科に入学してくる学生が散見され、少なからぬ学生が「保育現場」や「子ども」について知識や体験的理解が希薄なまま授業を受講し、実習を行わざるを得ない状況にあると考えられる。そのような状況で実習生として保育現場に臨めば、学生たちは実習での学びの見通しを持つことが困難となり、大きな不安や戸惑いを抱えるだろう。一方で、施設や保育所・幼稚園から養成校に対しボランティアやアルバイトの要請は年々増加していることから、この状況を実習への準備教育に生かすこと、すなわちボランティアとして保育体験活動を行うことを推奨し、実習開始前から保育現場や子どものイメージを豊かに持ってもらうことで、実習に臨む際の不安を低減し、保育者となるための学びを促進することが期待できると考えた。

そこで本研究では、短期大学の保育者養成課程における保育実習事前指導の一環として、保育所・幼稚園・福祉施設等で保育体験ボランティアを行うことを課題として提示し、その保育体験の前後で進学動機、活動内容、体験への期待や自覚された学びの内容等についてアンケートを実施した。そして、それらの要因と、実習への意欲と不安および保育職への意欲との関連性を検討することで、保育体験で得られたどのような学びが具体的に実習や保育職への意欲や不安につながり得るのかを明らかにし、今後の実習指導のあり方について考察することを本研究の目的とした。

方法

調査対象

私立の短期大学（2年制）保育士養成課程に在籍する1年生139名を対象とした。

調査内容

1 回目

①**短期大学への進学動機**：荻野（2006）の調査票を参考に「資格・免許を取って、保育職に就きたいから」「専門的な知識や技術を得たいから」「子どもが好きだから」「就職に有利だから」など10項目を作成した。

②**短期大学入学前の保育体験**：はじめに、短期大学入学前の保育体験の「ある」、「なし」のいずれかで選択した後、「ある」と回答した学生に対しては、「いつ」「どこで」「何日間」実施したかについて、および保育体験をした理由についてたずねた。

③**保育体験への参加意思**：自主的動機の度合いを把握するため、「無償でも（有償なら）保育体験をしたいか」をたずねた。

④**保育体験の学びの期待**：保育体験を通して学べることとして、どの程度期待をもっているのかについてたずねるために、「保育現場の一日の流れが理解できる」「実際の保育者の役割や仕事について理解できる」「職員同士の雰囲気を知ることができる」など14項目を作成した。作成に当たっては、平成25年度専門委員会課題研究報告書「保育者の専門性についての調査」（全国保育士養成協議会，2014）を参考とした。

2 回目

⑤**参加した保育体験の内容**：実施場所については、幼稚園、保育所、認定こども園、児童福祉施設等の中から、対象児・者については、乳幼児、児童、中高生、成人利用者、保護者の中から、それぞれ1つを選んで○で囲むよう指示した。活動時間については、比較しやすいよう日数と時間数とで記入するようにした。複数の場所で行った学生がいることを考慮し、最大3件について書けるようにした。

⑥**保育体験後の実習・就職に対する感情**：「実習への意欲が高まった」「実習が不安になった」「保育者になりたい意欲が高まった」「保育体験活動に行った園・施設に就職したいと思った」という4項目をたずねた。

⑦**保育体験後の学びの実際**：④で尋ねた質問項目の語尾をすべて過去形に直して使用した。合計14項目。

以上の内容について、①については、「まったく当てはまらない（1点）」「あまり当てはまらない（2点）」「ややあてはまる（3点）」「とても当てはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。③④⑥⑦については、「まったく思わない（1点）」「あまり思わない（2点）」「やや思う（3点）」「とても思う（4点）」の4件法で回答を求めた。

調査時期および実施方法

保育体験活動前後の5月（1回目）と9月（2回目）に、質問紙調査を実施した。質問紙は、授業を通して配付・回収した。調査に対する同意については、調査の概要と回答を拒否する権利や回答を中断する権利があることを説明する文章を質問紙の冒頭に明記し、その旨を調査実施者より口頭でも説明した。回収率は、1回目が89.2%、2回目が98.6%であった。

調査対象者へは、1回目の際に、次の内容について伝えた。

保育体験参加の期間は、2017年5月から9月の間とした。体験場所は、幼稚園、保育所、認定こども園、学童保育、託児所、児童福祉施設等、乳幼児及び児童を保育する施設、親子・乳幼児対象イベント等を、保育体験の場所として例に挙げ、卒園施設に打診する、電話等で問い合わせる、大学に来るボランティア等募集の案内から応募する等、保育施設を決定する方法は特に制限しないこと、自分で探すことが難しい場合には、教員からの紹介も可能であることも伝えた。体験の日数や期間は、特に設けなかった。内容としては、保育補助、行事・イベントのお手伝い等であることを伝えた。

研究の実施にあたっては、研究倫理委員会の承認を得た（常磐大学・常磐短期大学研究倫理委員会 100071号）。

統計処理には、SPSS(Version25)を使用した。

結果と考察

入学前の保育体験の実態

入学前の保育体験の有無についてたずねたところ、有りが103名、無しが16名であった。有りと答えた者が、いつ、何日間行ったのかについてたずねた結果をTable 1に示す。なお、現在も行っていると回答した者は3名で、月1回が2名、月2回が1名であった。この結果から、多くの学生は、日数に差はあるものの、入学前に何らかの形で保育体験活動を行っていることが明らかになった。これは、必要を感じて自主的にボランティア等で活動する場合もあるが、近年、授業の一環で乳幼児と一緒に遊んだり簡単な日常のお世話をしたりする機会を設ける中学校や高等学校が増加していることも関係していると考えられる。また、高等学校では、進路指導として、保育系を志望する学生に保育施設における体験活動を推奨するケースも多いことから、学科の入学者の特性上、そうした影響も考えられる。いずれにしても、日数や内容等には個人差があるが、少なくともほとんどの学生は入学前に一度は保育施設等に入入りし、子どもたちと関わったりするなどの体験があるので、短大入学後に保育体験活動を提示されても、過去の実験から保育施設を選択したり活動内容をイメージすることはそれほど困難ではない状況にあると考えられる。

Table 1 短大入学前の保育体験の時期と日数

		授業		自主的 (N=30)	合計
		中学校 (N=81)	高校 (N=51)		
日数	平均	2.16	2.64	4.29	3.63
	標準偏差	0.97	2.19	4.34	3.83
	範囲	1－7	1－15	1－20	1－24

保育体験への参加意思

1 年次 5 月の段階で、在学中に保育体験をしたいと思うかどうかについてたずねた結果を Table 2 に示す。有償・無償を問わず、ほとんどの学生が多少なりとも保育体験をしたいと思っていることが明らかになった。実行するか否かはともかく、ほとんどの学生が短大での学びのスタート時期には、保育体験活動を行う必要性を感じているといえる。しかし、いざ短大での生活が始まると、授業やアルバイトで時間がなく、自主的に保育体験活動を行う余裕がなくなってしまう（三澤，2016）、多くの保育施設から寄せられるボランティア活動等に参加する学生が少なくなる実態がある。必要性を感じている早い時期に、保育現場とつながり、保育に携わる機会を投げかけていくことが、入学後の専門的な学習への意欲を高めるきっかけになるのではないかと考える。

Table 2 在学中に保育体験を希望する程度(人数)

	まったく思わない	あまり思わない	やや思う
無償	0	4	37
有償	0	5	32

参加した保育体験の内容

1 年次 5 月～9 月の間に学生が参加した保育体験の内容は、次の通りであった。保育体験を行った場所は、幼稚園が31名、保育所が49名、認定こども園が16名、児童福祉施設等が13名、その他が53名であった（複数回答可）。保育体験を行った場所の数は、0 か所が6 名、1 か所が98 名、2 か所が32 名、3 か所が3 名であった。保育体験を行った日数の平均は学生 1 人あたり 3.56 日（SD=5.79, 0－33）、保育体験を行った合計時間数の平均は、20.41 時間（SD=30.32, 0－174）であった。

本研究では、保育体験受け入れ先の探し方・交渉は、学生個人に任せた。保育施設が約半数、残りは親子向けのイベントや学童保育等での実施であったが、親子向けのイベントと保育園等の

保育施設では、体験できる内容や関わる対象にも大きな違いがある。学生にとっては、保育体験をさせてもらえる施設を探すことすら、知り合いがいなければなかなか困難な場合もあるが、自分で調べたり連絡を取ったりしながら探すのもまた学習につながるという捉え方もできる。「保育」「子ども」「保護者」をキーワードに幅広く様々な体験を積むことに重きを置くか、実習や就職を念頭に置いた保育施設の実態を知ることにも重きを置くか、保育体験の時期と目的によって、施設等の種類を限定して提示したり、紹介したりすることも検討する必要がある。

Table 3 保育体験での学びに対する体験前の期待と体験後の実際 (N=116)

質問項目		平均値	標準偏差
1. 保育現場の一日の流れが理解できる	前	3.80	.40
保育現場の一日の流れが理解できた	後	3.10	.90
2. 子どもの遊びや生活が理解できる	前	3.72	.47
子どもの遊びや生活が理解できた	後	3.27	.64
3. 保育現場の実際の状況を知ることができる	前	3.66	.51
保育現場の実際の状況を知ることができた	後	3.25	.76
4. 数日間の保育体験からは、あまり学べることはない	前	1.70	.77
数日間の保育体験からは、あまり学べることはない	後	1.73	.66
5. 実際の保育者の役割や仕事について理解できる	前	3.63	.54
実際の保育者の役割や仕事について理解できた	後	3.27	.69
6. 職員とかかわったり、知り合いになったりすることができる	前	2.91	.79
職員とかかわったり、知り合いになたりすることができた	後	2.91	.85
7. 子どもとかかわり方を知ることができる	前	3.70	.48
子どもとかかわり方を知ることができた	後	3.23	.66
8. 自分の力を試すことができる	前	3.16	.71
自分の力を試すことができた	後	2.78	.81
9. 挨拶や返事、服装、言葉遣いなど、社会人としてふさわしいマナーを学ぶことができる	前	3.55	.59
挨拶や返事、服装、言葉遣いなど、社会人としてふさわしいマナーを学ぶことができた	後	3.41	.65
10. 日誌の書き方を学ぶことができる	前	3.38	.71
日誌の書き方を学ぶことができた	後	1.96	1.02
11. 職員同士のチームワークを学ぶことができる	前	3.39	.66
職員同士のチームワークを学ぶことができた	後	3.07	.77
12. 職員同士の雰囲気を知ることができる	前	3.55	.61
職員同士の雰囲気を知ることができた	後	3.27	.73
13. 子どもの発達を理解できる	前	3.53	.64
子どもの発達を理解できた	後	3.05	.73
14. 就職してから学べばよいと思う	前	1.56	.74
就職してから学べばよいと思う	後	1.48	.55

保育体験での学びに対する体験前の期待と体験後の実際の比較

保育体験を通した学びについて、入学当初の学生が何をどの程度期待しているのか、実際に保育体験へ行ったあと、どの程度学べたと感じたのかを比較した結果をTable 3に示す。その結果、保育体験へ行く前に比べて、行った後はほとんど全ての項目において平均点が低下していた。これについては、体験後の得点は体験前に比べて標準偏差の値が大きくなっていたことから、保育体験をした場所によって、実際に学ぶことができた内容と程度に差が生じたことが影響したと考えられる。ただし、低下したとはいっても得点はいずれも4件法で3.0以上を維持していたことから、全体としては、保育体験を通して学びが得られたと言って良いだろう。一方、項目10「日誌の書き方を学ぶことができる（できた）」に関しては、目立った得点の低下が見られた。実習とは異なり、保育体験は日誌を書くことは求められないのが通常であるため、当然の結果であると言えよう。以上の結果から、保育体験前、学生の多くは、保育体験で保育に関する様々な学びが可能であると考えていること、実際に保育体験をした後も、期待していたほどではなかったとしても、少なからず保育に関する学びが経験できたと考えていることが明らかになった。

今回の研究では、保育体験施設は自分で選択したため、学びの実際の内容については個人差が生じた。親子向けのイベント補助等に参加した学生と保育所に数日入って活動した学生とでは、実感する内容には大きな違いが出る。また、多種多様な保育施設で、数日間という短い期間では、「保育」や「子ども」について「分かった」「理解できた」と実感しにくい部分もあったと思われる。それでも、養成校入学という将来の職業の方向性がある程度決定した段階で、将来をイメージできる場所に身を置いて自分が目指そうとする職業を肌で感じることで、そして各々に自己の課題と向き合う経験をすることは、その後の学びへの意欲や課題解決に大きく関わってくるものと考えられる。そうした意味で、学生が「保育に関して学びが得られる」と実感できる保育体験活動を取り入れることは意味のあることであると考ええる。

保育体験後の実習・就職に対する感情

保育体験後に実習・就職に対してどのような感情を抱いたのかについてたずねた結果をTable 4に示す。その結果、実習への意欲（平均3.40）と保育者になりたい意欲、すなわち保育職への意欲（平均3.46）は、いずれも大多数の学生において高まったことが明らかになった。一方で、実習が不安になったと回答した学生が133名中67名と約半数を占めていた（平均2.52）。

ほとんどの学生は、特に初めての实習前には何らかの不安を感じるものであり（鈴木・仲本, 2005）、その心理面への支援を含めた事前指導の工夫・検討が求められているが、本研究でもそのことが明らかになったと言える。保育体験を通して、将来就こうとする職業のイメージが具体的になった分、自分の力量や適性について不安を感じた学生が多くいたのではないかと考える。

なお、保育体験へ行った園・施設に就職したいと思ったかどうかについては、全体的に人数のばらつきが見られ（平均2.53）、必ずしも保育体験がその園・施設への就職動機にはつながらないようである。

Table 4 保育体験後の実習・就職に対する感情

質問項目	合計 人数	人数				平均値
		まったく 思わない	あまり 思わない	やや思う	とても思う	
実習への意欲が高まった【実習への意欲】	134	0	9	63	62	3.40
実習が不安になった【実習への不安】	133	7	59	58	9	2.52
保育者になりたい意欲が高まった【保育職への意欲】	134	2	8	50	74	3.46
保育体験活動に行った園・施設に就職したいと思った	134	16	52	45	21	2.53

短大への進学動機と保育体験での学びが実習への意欲と不安および保育職への意欲に与える影響

分析に先立ち、短大への進学動機に関する10項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量が二重負荷を示した3項目を削除し、7項目について再度同様の因子分析を行った。初期解における固有値の減衰状況（第1因子1.91、第2因子1.70、第3因子0.96）と解釈可能性から最終的に2因子が抽出された（Table 5）。第1因子は、保育職に就きたいという明確な理由を示す4項目に高い負荷を示したことから「保育志向的動機」と命名した。第2因子は、他者から勧められたなど、職への強い希望を持たない理由を表す3項目に高い負荷を示したことから、「他律的動機」と命名した。各因子の内的整合性を検討するため、Cronbachの α 係数を求めたところ、「保育志向的動機」が $\alpha = .57$ 、「他律的動機」が $\alpha = .60$ であった。内的整合性が確認されたとは言い難い低い値であったため、今後の結果の解釈には注意が必要であると考ええる。

同様に、保育体験での学びに関する12項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。

Table 5 短大への進学動機尺度の探索的因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)と因子間相関

項目	F1	F2
第1因子: 保育志向的動機		
(3) 専門的な知識や技術を得たいから	.76	.12
(1) 資格・免許を取って、保育職につきたいから	.70	-.04
(4) 子どもが好きだから	.40	-.08
(5) 得意なことが生かせるから	.32	.01
第2因子: 他律的動機		
(9) 先生に勧められたから	-.03	.85
(8) 親に勧められたから	-.05	.64
(2) とにかく進学したかったから	.10	.31
因子間相関	F1	-.04

当初作成した項目のうち、「4. 数日間の保育体験からはあまり学べることはない」、「14. 就職してから学べばよいと思う」という2項目については、他の12項目とは異なり、具体的な学びの内容を示した項目ではないため、予め因子分析から除外した。また、因子負荷量が二重負荷を示した3項目を削除し、9項目について再度同様の因子分析を行った。初期解における固有値の減衰状況（第1因子4.09、第2因子1.35、第3因子1.12、第4

因子0.66) と解釈可能性から最終的に3因子が抽出された (Table 6)。第1因子は、「1. 保育現場の一日の流れが理解できた」「2. 子どもの遊びや生活が理解できた」など、保育現場の実際の様子が理解できたことに関する5項目に高い負荷を示したことから「現場の理解」と命名した。第2因子は、「11. 職員同士のチームワークを学ぶことができた」「12. 職員同士の雰囲気を知るこ

とができた」の2項目に高い負荷を示したことから、「職員の様子」と命名した。第3因子は、「8. 自分の力を試すことができた」「7. 子どもとのかかわり方を知ることができた」の2項目に高い負荷を示したことから「実際の関わり」と命名した。各因子の内的整合性を検討するため、Cronbachの α 係数を求めたところ、「現場の理解」が $\alpha = .81$ 、「職員の様子」が $\alpha = .84$ 、「実際の関わり」が $\alpha = .76$ であった。この結果、各因子には内的整合性があることが確認された。

以降の分析では、上述の因子分析において、各因子に高い因子負荷を示した項目の平均値を算出して下位尺度得点として使用した。以降の分析で使用する変数間の相関係数および各変数の平均値、標準偏差をTable 7に示す。

Table 6 保育体験での学び尺度の探索的因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)と因子間相関

項目	F1	F2	F3
第1因子:現場の理解			
(1)保育現場の一日の流れが理解できた	.76	.08	-.20
(2)子どもの遊びや生活が理解できた	.75	-.30	.17
(3)保育現場の実際の状況を知ることができた	.74	.17	-.05
(5)実際の保育者の役割や仕事について理解できた	.49	.38	.05
(4)子どもの発達を理解できた	.46	-.07	.27
第2因子:職員の様子			
(11)職員同士のチームワークを学ぶことができた	-.09	.86	.04
(12)職員同士の雰囲気を知ることができた	.01	.84	.04
第3因子:実際の関わり			
(8)自分の力を試すことができた	-.10	.08	.78
(7)子どもとのかかわり方を知ることができた	.07	.04	.77
因子間相関	F1	—	.49
	F2	—	.37

Table 7 各変数間の相関係数および平均値、標準偏差 (N=116)

	1	2	3	4	5	6	7	平均値	標準偏差
1. 保育志向的動機	—							3.63	.35
2. 他律的動機	-.01	—						2.36	.67
3. 現場の理解	.18	.15	—					3.20	.55
4. 職員の様子	.21 *	.18 *	.43 **	—				3.19	.68
5. 実際の関わり	.29 **	.12	.43 **	.34 ***	—			3.01	.68
6. 実習への意欲	.27 **	.15	.37 **	.28 **	.25 **	—		3.39	.63
7. 実習への不安	-.22 *	.04	.02	.06	-.05	-.06	—	2.51	.69
8. 保育職への意欲	.44 ***	-.06	.21 *	.28 **	.26 **	.48 ***	-.08	3.49	.67

Note. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

(1) 短大への進学動機と保育体験での学びが実習への意欲に与える影響

はじめに、短大への進学動機と保育体験での学びが実習への意欲に与える影響を検討するため、実習への意欲を従属変数として階層的重回帰分析を行った。第1ステップには短大への進学動機に関する2つの下位尺度を投入し、第2ステップには、保育体験での学びに関する3つの下位尺度を投入した (Table 8)。その結果、第2ステップで説明率の増加が確認され、($\Delta R^2 < .11$, $p < .001$)、保育志向的動機 ($\beta = .21$, $p < .05$)、現場の理解 ($\beta = .33$, $p < .001$) が高くなるほど、実習への意欲が高まることが示された。この結果から、もともと保育志向的動機が高い学生が保育体験を通して実習への意欲が高まるのはもちろんのこと、保育体験における現場の理解、すなわち保育現場における一日の流れや子どもたちの様子、保育者の仕事の内容を理解することが実習への意欲につながることが明らかになった。このことから、保育志向的動機の高い学生には、1年次の早い段階から、保育現場や保育者の仕事について具体的・体験的に学ぶ機会を取り入れていくことで、実習への意欲を高めることができると考えられる。

(2) 短大への進学動機と保育体験での学びが実習への不安に与える影響

次に、短大への進学動機と保育体験での学びが実習への不安に与える影響を検討するため、実習への不安を従属変数として同様の階層的重回帰分析を行った (Table 8)。その結果、第2ステップで投入された変数がいずれも有意にならず、保育志向的動機 ($\beta = -.22$, $p < .05$) のみ有意な負のパスを示した。この結果から、保育志向的動機が低い状態で入学した学生は、保育体験によって実習への不安が高まる可能性があること、保育体験での学び自体が実習への不安に特定の影響を及ぼすわけではないことが示唆された。これは、志望動機が高い者ほど実習に対する不安は低いという大平 (2009) の知見と同様の結果であったとも言える。一方で、将来の目標が明確でないまま入学した学生は、保育体験によって現実を知り、近い将来直面する実習に対して不安が高まった可能性も考えられる。このような学生に対しては、日常の授業・事前指導を通して保育や実習に関する知識・技術を身につけさせていくことはもちろんだが、適性について前向きになれるような助言や励ましを心がけながら、学生が将来に対して自信が持てるよう丁寧に支えていくことが求められるのではないかと考える。

(3) 短大への進学動機と保育体験での学びが保育職への意欲に与える影響

最後に、短大への進学動機と保育体験での学びが保育職への意欲に与える影響を検討するため、保育職への意欲を従属変数として同様の階層的重回帰分析を行った (Table 8)。その結果、第2ステップで説明率の増加が確認され ($\Delta R^2 < .04$, $p < .05$)、保育志向的動機 ($\beta = .40$, $p < .001$)、職員の様子 ($\beta = .20$, $p < .05$) が高くなるほど、保育職への意欲が高まることが示された。この結果から、保育志向的動機が高い学生は保育体験を通して保育職に就くことへの意欲が高まるのはもちろんのこと、職員の様子、すなわち保育現場において職員が協力して働く様子を見ることが、自分も保育職に就きたいという気持ちを高めることが明らかになった。職員の様子が分かることで、保育者として働く自分をイメージでき、実習のみならず保育職に就くことへの意欲

にもつながると考えられる。池田（2016）は、「専門職・資格免許」を進学理由とした学生が、保育職という職業や職業人への興味、実践的な学びに意欲を持つ学生である可能性を指摘したが、本研究の結果もこれに沿うものであるといえよう。保育志望動機の高い学生に対しては、積極的に保育系のアルバイトやボランティア活動等を推奨し、実践力を高めていくとともに、教職員の一員としての自分が想像できる園に出合えるよう環境的にサポートしていくことが、将来的には、質の高い、そして辞めない保育者を育成することにもつながると考える。

Table 8 階層的重回帰分析の結果(N=116)

	実習への意欲		実習への不安		保育職への意欲	
	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2	Step 1	Step 2
保育志向的動機	.27 **	.21 *	-.22 *	-.24 *	.44 ***	.40 ***
他律的動機	.15	.10	.04	.02	-.06	-.10
現場の理解		.33 ***		.03		.07
職員の様子		.11		.10		.20 *
実際の関わり		.06		-.03		.10
R^2	.07 **	.17 ***	.04 *	.06	.20 ***	.22 ***
ΔR^2		.11 ***				.04 *

Note. * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$.

総合考察

保育体験の意義

様々な研究から、実習前に見学やボランティア等により保育実践に触れることの有用性は明らかとなっている（中原，2005 他）が、本研究においても、保育体験によって、大多数の学生が、保育体験活動から「何らかの学びが得られた」「実習や就職への意欲が高まった」と感じていることが示された。このことから、実習に出る前の1年次、しかも保育志向的動機の高い学生にとっては可能な限り早い時期に保育体験活動を取り入れることは、その後の実習や就職に対する意識・意欲を高める上で効果的であると考えられる。実習の経験が多くなれば、不安が軽減されることから（大平，2009）、実習前に様々な保育体験を積んでおくことで、実習に対して大きな不安を抱えずに臨むことが期待できる。課題としての保育体験活動のみでなく、学外からのボランティア要請や保育関係のアルバイト等、学生が保育の経験が得られる様々な機会が提供できるようなネットワーク作りに取り組む必要があろう。また、実習した施設が自分の期待に沿うようなところと思えたり、楽しく実習ができたと思えたりした「実習園との合致感」が保育者効力感に影響すること（三木・桜井，1998）、実習担当者の経験年数や年齢が実習生の不安に影響を与えること（大平，2009）を考えると、実習同様に、保育体験活動においても保育施設と連絡・連

携を図りながら進めていく必要があると考える。

保育体験活動による「不安」

多くの学生が保育体験活動によって「学びがあった」と感じている一方、その中の、約半数の学生は実習に対して、不安になったとも回答している。このことは、入学前までは漠然としていた保育職のイメージが、保育体験によって具体的になり、自分も同じようにできるのか、自分に向いているのかといった実力や適性について考える機会になったからこその不安である可能性が考えられる。今回の研究では、学生の抱える具体的な不安内容までは対象としていないが、今後はより具体的な不安について把握し、その不安が解消できるような事前指導の工夫・検討が求められるであろう。

不安の水準が高いほど、実習を回避・忌避する感情も強い（長谷部，2007）ことから、入学後の授業への取り組みが消極的であったり、学生生活における不安が強かったりする学生については、早い段階で把握し、必要に応じた個別指導を通して、学習意欲の維持・向上や実習・就職への不安に対するケアができるシステムを構築していく必要がある。入学後間もない段階で、入学時のモチベーションを把握し、各学生の感じる不安の要因や水準を具体的に捉え、個別の事前指導を行っていくことが、短大での学習や実習に対して前向きに取り組める姿勢や意欲につながっていくと考える。不安を回避せずに、実習経験を重ねていき、現実的に問題解決を図っていくことで不安は軽減し、達成感や満足感が得られるようになる可能性が高い（大平，2009）ことから、学生が不安を抱えつつもそれを乗り越え、実習が学生にとってよい経験になったと感じることができるようサポートしていくことで、学生の保育職への志望動機も高まることが期待できる。

今後の課題

第一に、保育体験の学生指導の方法について、保育体験の場所は学生の選択に任せたため、約半数は、実習を行う保育施設以外の場所での体験活動となった。自分たちが目指そうとする職業の幅の広さに気付く機会になったと捉えられる反面、体験の内容が多岐にわたり、保育体験による学びの質や内容にはかなりの個人差があった。「実習園との合致感」が保育者効力感に影響すること（三木・桜井，1998）、実習担当者の経験年数や年齢が実習生に影響を与えること（大平，2009）等を考慮すると、保育施設を指定したり、保育体験の目的・内容を詳しく示し、それに見合った施設を選ぶよう指導したりするなど、保育施設側とのより密な連絡・連携を図りながら進めていく必要があると考える。

第二に、研究の方法について、保育体験によって生じる学生の不安についても、その質や程度を具体的に把握し、全体的な事前指導と共に、学生一人一人に応じた指導の仕方を工夫・検討していく必要があろう。そのためには、不安を感じている学生に対し半構造化面接を行うなどして不安の内容を明らかにすること、また、彼らの不安や意欲が実際に実習へ行った後にどのように変化するかを追跡調査するなどの方法が考えられよう。

引用文献

- 福地昭輝・竹内マヤ子・宮本眞理子・古徳麗子・大見由香・柴田啓一・本間由佳・高畠扶貴（2016）保育者養成における社会力育成に向けたボランティア活動の実践と課題. 鶴川女子短期大学研究紀要, 34, 105-113.
- 長谷部比呂美（2006）保育実習に関する学生の意識について—実習不安を中心として—. 淑徳短期大学研究紀要, 46, 81-96.
- 池田幸代（2016）保育者養成校における学生の進学理由と保育者志望との関連における，実習前の保育ボランティア経験の意味. 東京立正大学紀要, 43・44, 259-267.
- 荻野正美（2006）短期大学への進学動機と学習意欲との関係—本学秘書科学生を対象に—. プール学院大学研究紀要, 46, 115-128.
- 河野博行（2007）学外の研修についての一考察. 香蘭女子短期大学研究紀要, 50, 133-139.
- 三木知子・桜井茂男（1998）保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46 (2), 83-91.
- 三澤恵（2016）保育者養成校と保育現場の保育連携活動における現状と課題—学生の実習とボランティアに関する調査—. 梅光学院大学論集, 49, 62-71.
- 中原大介（2005）保育体験実習が学生の学習意欲に及ぼす影響についての一考察. 大阪健康福祉短期大学紀要, 4, 95-106.
- 野中千都（2015）実習やボランティア参加による学生の学び. 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 6, 37-43.
- 大平泰子・関 仁志（2009）幼稚園教育実習生への指導の在り方に関する一考察～実習生の不安や悩みを中心に～. 富山短期大学紀要, 44, 73-79.
- 小山頭・岡村直樹（2016）保育者養成教育におけるボランティア経験の意義とその有用性に関する質的研究. キリスト教教育論集, 24, 29-46.
- 鈴木香奈恵・仲本美央（2005）幼稚園教育実習に関する研究（1）実習前の不安感について. 埼玉純真女子短期大学研究紀要, 21, 39-44.
- 浦田眞理子・山口真理・平野光佐登（2016）幼児保育学科学生による音楽ボランティア体験—意識の変容と表現力の向上に着目して—. 松本短期大学研究紀要, 25, 87-96.
- 全国保育士養成協議会（2014）保育者の専門性についての調査：養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み. 平成25年度専門委員会課題研究報告書.